

浜名湖花博 2024 視察報告書

2024年 5月 10日



浜名湖ガーデンパーク会場入り口にて

【目次】

2頁 視察行程・花博概要

4頁～ 視察を終えて

7頁～ 資料

基本構想(概要版) 基本計画(概要版) 静岡県・浜松市

実施計画(概要版) 静岡県・浜松市・湖西市、当日配布資料

日本共産党 横浜市議団

〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町 6-50-10 (市役所内)

TEL 045-671-3032 FAX 045-641-7100

◆視察日程

新横浜 7:45 発 → 浜松駅 9:19 着

レンタカーで移動

午前中: フラワーパーク会場視察 (1.5 時間)

午後: 浜名湖ガーデンパーク会場視察 (2 時間)

浜松駅発 19:17 発 → 新横浜駅 20:24 着

◆視察参加者

古谷やすひこ党市議団団長

白井まさ子党市議団副団長

みわ智恵美市議

宇佐美さやか市議

大和田あきお市議

政務活動員 2 人

同行者 1 人 (自費)

◆視察目的

2027 横浜国際園芸博覧会 (GREEN×EXPO 2027) に向け、横浜市では様々な関連事業が始まっている。しかし有料入場者数が半年 1000 万人と過大な設定となっており、特に輸送計画に深刻な問題を抱えている。国内の別地域で開催されている園芸博=花博を視察し、花博の実際の雰囲気や、参加方法、出展状況などを確認し、横浜の計画に活かすことを目的とした。

浜名湖花博について (公式 HP より)

【開催の経緯】

2004 年、静岡県と浜松市は浜名湖ガーデンパークにおいて「浜名湖花博(しずおか国際園芸博覧会/第 21 回全国都市緑化しずおかフェア)」を開催しました。「花・緑・水～新たな暮らしの創造～」をテーマに、ライフスタイルや潤いのあるまちづくりへの情報を発信しました。1990 年大阪花博、2000 年淡路花博に次ぐ、国際園芸家協会 (AIPH) が承認する国内 3 回目となる国際花博として、187 日間の会期中、約 545 万人の方が来場し、大盛況のうちに閉会しました。

また、10 年後には、浜名湖ガーデンパークとはままつフラワーパークを会場に、「浜名湖花博 2014～

花と緑の祭典～(浜名湖花博 10 周年記念事業・第 31 回全国都市緑化しずおかフェア)」を開催しました。「花と緑のオーケストラ～水辺で奏でる未来の暮らし～」をテーマに、2 会場の特色を生かした展示が好評であり、87 日間の会期中、目標入場者数 80 万人を大きく上回る約 130 万人が来場しました。

近年、新型コロナウイルスの感染拡大、デジタル化の進展等が私たちの日常生活に影響を及ぼしている中、地元の経済界から再度、花博の開催を契機に、浜名湖地域を活性化したいとの声があがりました。このため、デジタル社会の中で、花と緑のある暮らしを再認識し、“デジタル田園都市”の実現に向けて、「浜名湖花博 2024 (20 周年記念事業)」を開催することとしました。開催に当たり、2022 年 7 月に、静岡県、浜松市、湖西市、関係団体で構成する実行員会を設立しました。

【開催の意義】

①「デジタル田園都市」の実現

～技術、サービスの実証モデル～

都市の活力と田園の持つ豊かさに、デジタルを融合させた「デジタル田園都市」のロールモデルを提示することで、誰もが憧れる美しくゆとりのある暮らしと環境を創出する。

②「地域循環共生圏」の形成

地域の多様な資源を生かし、ガストロノミーツーリズムの推進、水産資源の回復、農福連携の推進等により、新たな地域循環を生み出していく。

③魅力ある暮らしの実現

DX (デジタルトランスフォーメーション) の推進や、食と花の都づくりを通じ、魅力ある暮らしの実現を図る。

④地域の魅力向上と発信

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーを生かしたサイクルスポーツの聖地づくりや、自然公園等の適切な管理により、地域の魅力向上と発信を図る。

⑤富を作る産業の展開

スマート農業や、次世代自動車開発、カーボンニュートラル等、先端技術を活用し、次世代を見据えた取組を推進することにより、富を作る産業の展開を図る。

⑥多彩な交流の拡大

ガーデンツーリズム、多文化共生、インクルーシブ社会への取組の推進等により、多彩な交流の拡大

を図る。

【テーマ】

人・自然・テクノロジーの架け橋
～レイクハマナ デジタル田園都市～

都市の活力と豊かな自然を併せ持つ庄内半島において、2004年（平成16年）に開催された浜名湖花博のレガシーを引き継ぎ、人・自然・テクノロジーをつなぐことにより、環境と調和し、持続可能な社会を前提とした、新たな暮らしを創造する「デジタル田園都市」の具現化を目指す。

花・緑にあふれた環境と先端技術との融合による「心豊かな暮らし（Well-being）」、「持続可能な環境・社会・経済（Sustainability）」、「地域発の産業革新（Innovation）」を体感できる実験場を目指す。

【拠点会場】

①浜名湖ガーデンパーク

2004年浜名湖花博開催のために整備。浜名湖花博終了後は、静岡県が都市公園として再整備。
総面積 56ha

②はままつフラワーパーク

1970年浜松市制施行60周年事業の一環として浜松市が整備。浜松市動物園に隣接。総面積 30ha

【入場料等】

浜名湖ガーデンパーク会場

大人前売り 600円 当日 800円
小・中学生前売り 300円 当日 400円

はままつフラワーパーク会場

大人前売り 700円 当日 1000円
小・中学生前売り 350円 当日 500円

両会場セット入場料

大人前売り 1200円 当日 1700円
小・中学生前売り 600円 当日 850円

期間パスポート

大人前売り 2400円 当日 3200円
小・中学生前売り 1200円 当日 1600円

【最終入場者数など】

2会場計来場者数 : 1,006,586人 (86日間)
浜名湖ガーデンパーク : 507,956人 (58日間)
はままつフラワーパーク : 498,630人 (86日間)

【視察を終えて】

宇佐美さやか議員

横浜市で2027年に開催予定の国際園芸博覧会を前に、静岡県浜松市で開かれている『浜名湖花博2024』を視察してきました。

今回の浜名湖花博の開催は、ここ数年の社会情勢である新型コロナウイルスの感染拡大やデジタル化の進展などにより変化しつつある中、地元の経済界から「花博の開催を契機に浜名湖地域を活性化したい」という声があがったことから開催することになったと聞きました。

党市議団が訪れた日は、平日でしたが、晴天ということもあってか、10時の開園に間に合うように到着しましたが、第一駐車場は満車となっていた。動物園第二駐車場を案内され、向かうところもほとんど埋まっていく状態。駐車場に並んでいる車は、浜松ナンバーが多く、次いで近隣市のナンバーとなっていたので、県内の方々が多く訪れていることがわかる。

はままつフラワーパークは、総面積30haで、1970年浜松市政施行60周年事業として市が整備。隣には市営の浜松市動物園がある。

隅々まで周ることはできませんでしたが、とにかく多くの方々が賑わい綺麗に咲き誇る花々をスマホやカメラで納めることに夢中でした。今回特設されたシアターでは、3Dを使った花博の動画を観た。残念ながら、私たちが訪れたのは、桜や藤、紫陽花の時期でもないのに、それらが咲き誇っていた時のパーク内の様子を知ることができた。こういっただけができるのも、テクノロジーの進歩のお陰でしょうか。

車で15分ほど移動し、2つ目の会場となっている、浜名湖ガーデンパークへ。こちらは、2004年の花博開催のために整備され、終了後は静岡県が都市公園として再整備した総面積56haの公園です。とにかく広い駐車場ですが、こちらも車がびっしりで、来場者の多さを実感。

まず、展望塔を目指し進み、エレベーターで最上階からパーク内の様子を見た。地上に下りて、今回新しく設置された日本庭園へ。かなりコンパクトに日本を表現していた。その後、印象派庭園「花美の

庭」へ行くと、何周類ものバラが出迎えてくれた。ここにも多くの方々がスマホやカメラを手に咲き誇るバラを、愛でていた。奥に進むと、木陰にベンチがありゆっくり座ることができた。バラの香りに包まれ、時折吹く気持ちのいい風に疲れもどこかへ。

さて、今回の花博の開催意義として6項目がHPで紹介されていましたが、隅々まで周りきれなかったこともあり、私が、見たのは、5番目に掲げられていた「富を作る産業の展開」の中の「スマート農業」の分野でした。ビニールハウスの中でトマトが栽培されていましたが、水やりのタイミングは全てAIによって制御されているというもの。ここに居られた方が、一生懸命説明してくださった。この方は、八百屋さんで、農家さんが減ってしまっただけで困ると、誰でも作ることができるようにAIによって作物を作る方法を考え出したというのですから、凄い。トマトを吊るす格好で、常に体重測定をしている。軽くなる＝(イコール)「萎れてきた」とAIが認識し少量の水をやる。根は、小さなポットに納め、根を掘られないストレスとほんの少しの水しかあたえないことで実を甘くすること、実を沢山つけさせるということに成功し、とにかく甘いトマトをつくっているそうです。ビニールハウスは、居抜きというかたちで譲り受けるなどして、初期投資を抑えて、数年後には、初期投資を上回る収入になると、誇らしげな顔で話してくださった。専業農家ではなく、AIで誰でも農家になれる時代が来ているのだと、知ることができた。

大きな日除けの下にテーブルと椅子が設置され、キッチンカーが並び、お土産などの売店がある広場では、次々と散策を楽しんだ方々が来ては、口々に「今日来て良かったわね!!」と言う声が聞こえた。とても広い会場なので「混雑している」と感じるのには一部のゾーンに限られていることもあり、自分にあったペースで周れることで満足感を得られるのかも知れません。

今回訪れてみて、期間中の花の手入れは、多くのボランティアの方々が担っているのが見て取れた。そして、あらためて、今回の開催にあたり整備した所は少なく、それほどの大掛かりな設備投資が行われていないなかでも多くの方々が訪れていることに驚かされた。

気がかりなのは、近年の5月からの気温上昇と夏の暑さ対策をどうしていくのかという問題です。日除けとベンチがいたるところに必要で、ミストシャ

ワーも設置が必要だと感じました。

そして、横浜では、大掛かりに土地の改変を行い、今ある自然を壊して、自然との融合を無理矢理はかろうとしています。果たしてどう融合させようとしているのか、公園部分の絵図しか無く、見えてこない部分の花博の全貌と開催後の計画は、とても不透明で、整備費の320億円も更に膨らむことは、容易に想像できます。インフラ整備から始まる横浜市の花博は、どうしても費用を抑えつつ、自然との融合を感じることができる博覧会にすることができるのかをあらためて考える良いきっかけとなりました。



